

最終講義の論旨

論文

商経論叢第22巻第2号
昭和62年2月

研究方法の基礎——科学の背景

茂 呂 森 一

今まで、経営学において、企業を中心とする諸現象について説明してきたが、これらについて、その科学としての研究の基礎を最終的に纏めてみると、概ね次の如くである。

科学的研究は、現実を解剖することにその本質があり、研究対象は、与えられた現実そのものである。

——例えば、吾人は街角において、商品の販売活動を見、商品を購入或いは販売することができ、また郊外において、製品の製造を行っている工場の現場で機械やその秩序を見ることができ、また、工場には何百の労働者が生活のために働く姿を見ることができ。

これらは、すべて現実そのものであり、それらの統合的単位体が企業である。そこで、吾々は企業の部分を目にすることができ、企業によって人間が生きるために必要な財貨獲得行為に、専念している現実を、この目に見ることができる。

これらの目に見える現実の背後には、それを動かしている人々の意識、目的、工夫、を理解し、感ずることができ
る。——そこにおける経営学の対象は、人的、物的、表象的、なる部分的諸要素、それらの諸関連、そして全体とし
ての特性、等である。

かくて、経営学における研究手段としては、度々述べてきた如く、客観的方法、および主観的方法を前提とする、
諸科学の総合的方法が必要となる。——かかる研究は、経済学的な研究のみならず、社会学、心理学、生理学、精神
医学、法学、会计学、等の諸科学による総合的、すなわちインターディシプリナリー (interdisciplinary) と言われる
学際的研究が要請される。即ち、総合のために用いられる各種の (各科学に特有な) 客観的方法、主観的方法の、体系
的な使用が要求されるのである。

かかる研究方法は、経営学においてのみならず、今日のあらゆる社会科学に共通するものであり、かかる傾向は今
後更に発展するものと思われる。

——ところで、この様に経営学に於ても、経営管理論に於ても、私が純粹科学としての理論の体系化を試みた根本
的な契機をなしたものは、以上の様な理論的な理由もあるが、実はこの他に、より重要な理由が、もう一つある。そ
れは、実は私の人生観に基づくものであります。

それについて述べれば、次の如くである。

……私は宇宙全体の不可解なる状況について、以前から限らない空漠の中に迷走していた。宇宙は無限に広く、逆
に、無限の極小にまで分割でき、全体の広がりとは不明である。全体は統一的である、と同時に、また非統一的な混沌
でもある。——吾人の出遇う社会現象は、意思行為によって因果的に、創造的現象として説明できるが、同時に、そ
れらは以前から、古くよりすべて決定されていて、運命的現象として解することもできる。かかる決定論も非決定論

も、同時に存在し、そのけじめを知ることにはできない。哲学的、或いは宗教的に、宇宙は有でもあり、同時に無でもある。宇宙の根源的要素は、物質か、精神か、他のものか、全く不明である。宇宙が維持されている現象は、意思的であり、無意思的でもある。

——誠に、宇宙とは矛盾そのものの形成であり、その本質は人間にとって、不可知である。矛盾の構成であり、不可知である。——(この様な思考は、殆どの多くの人々が一度は抱く疑問であるが、例えば、ヘーゲル (G.W.F. Hegel) は、精神哲学の中において、矛盾を弁証法的思惟過程の契機において、それを前提として宇宙を汎理論で纏めようとしている。⁽¹⁾……しかし、この様な観念論的理論化を更に超えた、実体としてのあるもの、について、私は問うのである。

私は宇宙全体の不可知なる状況について、それらは人間にとって、所詮不可知に終る様に思えるのである。

——しかし、そうした望みなき空虚の中で、私はある時、基本的な事実の中で一つだけ明白なる或る根底をなす事実に行当たったのである。

それは、人間、あるいは生物は、自分で自分を創ったのではなく、最初は何かによって作られたものであり、存在たらしめられている、という動かし難い事実である。

この事実、理論によってではなく、空白な疑念の後で、行動によって体感され、漸次日常的にも拭い去ることのできない事実になってきたのである。

(——この様な考え方は、古くより言われてはいたが、例えば哲学者のハイデガー——[M. Heidegger]の言葉は同じ様な意味を示している。彼は実存哲学の出発点として、「人間はこの世に存在たらしめられているという被投性をもつ。それは人間存在の先験的アプリアリーである⁽²⁾」と述べている。

しかしハイデガーは哲学上のアプリアリーとして措定しているのであるが、私にとっては、寧ろ生活的な帰結に近いものであつ

た。

——そこで、次に、では最初に人間を作ったものは、何者であるか、ということが問題になるのである。

人間として作られた今日の人の形においては、人間は自律的であり、受動的であるが、それを創造し、存在たらしめている何かがある、ということが、体得され、問題になってくるのである。

そして、それについては、上記の様な混沌として捉えることのできない宇宙に在る、ある大きな力の様なものの働きによって、人間は存在しているものである、と私は信ずる様になったのである。

その力というのは、目に見えないある統一的な根本原理的な、分らない力みたいな、物的、或いは精神的な原理みたいな、或る大きなものである。そのある大きなもの、の姿を人間は見ることも想像することもできない。しかし、私は行動的に、その大きなものに接近することができ、一種の同一視するみたいな体感を得ることができた。それを私は表現することができないので、絶対者みたいなものという用語を仮に用いることにする。この絶対者みたいなものの存在を私は信ぜざるを得ない。この絶対者みたいなものに対しては、私は無限の、重さのない、霧の中に在る。(その様な体験は、いつでも、誰にでも、為され得る、と言う如きものとは違うのであるから、これにより経験科学を成立させることは不可能である。)

そうした把握の結果、宇宙的存在の中にある、ある種の核を把握することによって、その様な核の様なものとは區別される地上的な諸現象について、その分析を安心して行える様になったのである。即ち、核的なものを把握することによって、科学の領域を瞭りと限定することができるようになったのである。

——そこで、私は、宇宙のあらゆるものを含めたすべての現象の中で、科学的技術によって説明し得る部分のみを取出して、集めて、それをあらゆる研究方法を使用して、科学理論の体系化を試みたのであるが、それが私の研究の

基礎になったのである。

従って私は、科学を信ずると同時に、大きな力の様な存在をも信ずるのである。この様な確信によって、私は思考し、科学し、行動する。また、それと同様に、私は日常的人間性を肯定すると同時に、それを超えた人間の持つ日常性以上のある種の奥深い力の存在を信ずるのである。

注

(1) ヘーゲル (G.W.F. Hegel)

歴大で難解なヘーゲル哲学について、その本旨を説明することは、先ず不能とも思われるが、文中の「矛盾」の概念に関して、若干の文例を引くことにする。

矛盾は、彼にとって概念総体を目指す弁証法的思惟過程の促進的契機として扱えられている、言はば、アプリアリーである。弁証法は、世界の論理化の前提となる原理であり、用具でもある。即ち、ヘーゲルにとっては弁証法の本質は、概念に内在する矛盾（或いは否定）を指定する思惟活動としてとられている。

「あらゆる意識は、統一性と分離性を含んでいる。従って、矛盾を含んでいる」(精神哲学、上巻、三七頁—船本信一訳)

「すべてのものは、それ自身において、矛盾するものである」(大論理学、中巻、七七頁)

「弁証法は、現実の世界の凡ゆる運動、凡ゆる生命、あらゆる活動の原理である。また凡ゆる学的認識の魂である。——一般に有限的なもの、自分自身の中で自己と矛盾し、それによって自己を揚棄する」(小論理学、上巻、二四六頁—松村一人訳)

——ヘーゲルは弁証法によって世界を解釈し、その論理化を行っているが、筆者の観点は、矛盾による非論理の世界を指摘することであり、無規定の上に世界は不可知に終るのである。

(2) ハイデガー (Martin Heidegger), *Sein und Zeit*, 1927 寺島実仁訳

ハイデガーは、人間は他の人や物と共に、世界の中にある、ということをも前提として存在論を展開する。そして、そこにおける人間存在のあり方は、自らでなく、何かにより投げられた存在として説明する。

「現存 (Da Sein) (人間存在の意) には本質的に、世にあること (Sein in einer Welt) が属している」a. a. O. S. 13

「人間存在の存在規定は、吾々が、世にあることとなす存在機構を、根底として、先験的に理解されねばならない。——それは人間存在の先天的必然の構造規定 (a priori notwendige Verfassung) である」a. a. O. S. 53

「人間存在を吾々は、この存在者のへにあるへの被投性 (Geworfenheit) と名付ける。——被投性は投げられたる事実性 (Faktizität der Überantwortung) を暗示すべきである」 a. a. O. S. 134

ハイデガーは、人間は世界の中にある、ということを先験的事実として前提し、そこにおける人間は、関心する実存であり、「投げられたる存在」である、となす。

——筆者の厳密なる意味では、存在の態様について、人間は投げられたる存在か否かについては不明であり、他者との同時生起も有り得るが、これも了解不能であり、ただ人間存在は、他の何かが存在たらしめている、という、その体験的事実だけを意味している。ハイデガーは理論上ア・プリオリと措定するが、筆者は理論を超えた無規定の中に、体験的事実を、事実として掘り起すのである。